栄区文化協会広報誌

さわやか

題字　安藤紫水氏揮毫

NO.48
2015年9月発行
発行：栄区文化協会
http://sakae-bunkyo.com

来年は文化協会設立から20年
～会員間の交流を深めよう～

栄区文化協会　会長　風間 聰彦

第20回総会にて　（文化協会役員）

来年２月、栄区文化協会は設立20周年を迎えます。20周年を意義ある節目の祝い年にしようと「20周年記念事業企画委員会」を、各単位協会から選出された委員20名によってこの６月にスタートさせました。

そして栄区では、来年11月に「栄区制30周年」を迎えるに当たり“現在・過去・未来”の振りよろしく、“感謝・つながり・夢”をテーマに、オール栄区の態勢で、そのプレステージを６月から展開中です。

文化協会は20歳までの秒読みに入り気持ちも高揚して来ています。

ヒトで言えば20歳は成人と呼ばれ、祝福・期待される存在となり同時にもう一段高い役割・責任を担える場に立つ人になります。

文化協会は設立以来、その分に応じ能力の範囲で、地域プロジェクトとの協働、地域での課題共有など、その都度役員はじめ会員の皆さんの加勢・合力によりその任を果たして参りました。

特に舞台系の単位協会、活動グループは日常的にボランティア事業を組み入れたスケジュールで地域に溶け込んだ活動を続けて来ています。一方各会員個人が研鑽修得した技量は、芸術祭・文化祭時の来場者の声を聞くにつけても、そのレベル・向上度はかなりのものと評価されており、私自身も各会場での出来栄えに啓発され、心がなごみ豊かになるのを感じてきました。

このように、文化協会の活動は適度のスピードを持って目指す方向へ進んでいると言えますが、もう一つ重要なポイントがあります。

それは、会員間の協調、交流、親睦（文協会則第２条「目的」）の面をもう少し膨らませたい事です。丸いゴムまりの凹みを充実させれば、加える力は同じでも毬は更に大きく弾むようになります。会員間のつながり、集まって一杯のノミニケーションの話ではありません。たまには好いかも知れませんが。

自分自身の趣味・得意技を高めることに加え、他ジャンルの趣味・修練に勤しむ仲間たちの作品（有形・無形）に接して何かを感じ取ることができれば、リスペクト感に通じ交流・親睦へと進み易くなります。

出展者、出演者にとって来場者が多いことは、如何なる賛辞よりもヤル気を刺激されます。そしてあなた自身“自分たちの会場は満員、大賑わいであって欲しい”と願って居る筈なのです。

芸術祭への来場者数は、ここ数年間11,000名台です。会員2,200名が創りあげた作品展、舞台公演としては少し物足りない気がしませんか。

この秋の栄区民芸術祭には、全会員が自分の予定表にイベント日程をしっかり書き入れて“あの女声コーラスを聴きに行こう”“彼の絵を観にリリスへ・・・”と、家族、友人、会員も誘い出して下さい。さらに言えば、展示系の人は舞台を観に、舞台系の人はギャラリーめぐりをこころがけると好いでしょう。思いがけない収穫に出会います。私のお奨めコースがこれです。

文化協会という文字の意味は「多くの力が寄り合う」です。この力の発揮を最大の目的とした団体であることも心に留め置いて下さい。

「数は力なり」と吠えて強引に仕切った政治家がいましたが、当方は品よく「数は魅力なり、揚力成り」と言い換えましょう。

さあ、芸術の秋。街路樹も色づきます。２～３時間の散歩を楽しむ感じで・・・

気軽にリリスへ、公会堂へ出掛けましょう。

特集２《あーすフェスタかながわ2015》に国際交流として参加

《せかいのごあいさつを毛筆で》

古来、書道は文化の最高部門の一つとされ親しまれてきましたが、現在は日常生活で毛筆を使うことは少なくなっています。そうした中、５月16日あーすぷらざで、ワークショップ“せかいのごあいさつを毛筆で”が開催され、昨年を20人以上も上回る72人の参加者が、栄区書道協会の講師の指導のもと、かぐわしい伝統文化の香りを実感しながら楽しい時間を過ごしました。参加者は小学から大学までの外国人を含む学生が多く、中には両親に連れられた幼児もいました。

このワークショップは、用意された世界各国の挨拶文の中から、各参加者がその一つを選び、その国の文字で46cmx35cmの大きさの紙に毛筆で書く、というもの。いざ始めてみると、参加者の多くが正しい筆の持ち方や腕の構え方、筆の運び方などの指導を必要としましたが、講師の指導を受けながら終りには、堂々とした個性的な作品を書き上げることがでました。印が押されると、朱色の印影が作品をいっそう引き立てました。短い時間ではありましたが参加者たちは、達成感とともに書がもたらす独特の心豊かさを感じ取ったのではないでしょうか。

大事そうに作品を持ち帰る参加者たちの姿を目にしながら、書道が人の精神に働きかける力を再認識する一日となりました。　　栄区書道協会　柳田　煌海

《せかいのお茶をどうぞ》

風薫る５月17日あーすフェスタかながわ2015「世界のお茶をどうぞ」の活動に“日本のお茶”としては初めてお煎茶が参加いたしました。家庭で楽しめる美味しい煎茶をテーマに、季節の和菓子でのおもてなしです。出足が心配されましたが徐々に増え、ご家族連れやお友達同士、海外から里帰りの娘さんとお母様、お一人で静かに茶菓を楽しまれる方等、大勢の方々をお迎えしました。殆ど初対面の方々でしたが、煎茶のまろやかな味や、和菓子を通して話題も広がり、親しく会話を楽しませていただきながら、忙しくも和気あいあいと過ごさせていただきました。

今回は、韓国・中国・日本の三か国による世界のお茶でした。日本の茶は中国から渡来しました。一説によると栄西禅師が持ち帰ったとされています。815年崇福寺の大僧正永忠(えいちゅう)が嵯峨天皇に茶を献上したのが最も古い記述とされます。同じ頃、朝鮮半島を訪れた中国の使節の記録に、中国の団茶(葉を蒸し臼でつき固め焙って乾かしたもので、湯が沸騰したところに粉茶を投じ、よくかき混ぜ椀に移し飲む)をみな喜んで飲んだとあります。

この度の三か国での開催は、お茶のルーツを思い起こし遠い昔にふれ、しみじみと深く心に感じる日でもありました。　　栄区礼法の会　前田菱紀

《ここ(栄区)から発信　未来へGO！》

５月17日12:20からリリスホールで４つのパフォーマンスのステージが開演されました。

１番目は、ダイアナ石山SONG＆DANCEミュージカル教室の皆さんで、若い人たちが英語でミュージカル・ナンバーを歌い、踊るという楽しく、躍動感にあふれた演技でした。

２番目は、神奈川朝鮮中高級学校民族管弦学部の皆さんが、朝鮮の伝統的な曲を、朝鮮の楽器で、清楚に、美しく演奏され、その音色はこころに深く響きました。朝鮮の楽器の演奏による興味ある紹介もありました。

３番目は、The Up Cedar's ミュージシャン・バンドの皆さんによるボーカル、ギター、バイオリン、ベース、ドラムからなる演奏で、大きなサウンドがリリスホール全体に響き渡りました。

４番目が栄区民謡連盟の出演でした。６人のメンバーで箱根馬子唄（神奈川県）、能代船方節（秋田県）、隠岐祝音頭（島根県）、真室川音頭、花笠音頭（山形県）と各地の代表的な民謡を、尺八、三味線の演奏とともに聞いていただきました。若い方のこころに届き、次世代につながりますようにという思いを込めて演奏し、会場はお客様の手拍子をいただき大いに盛り上がりました。

最後はプチフィナーレとして、この４つのすべての出演者がステージに会して共演しました。この時にしか見られない異色のコラボレーションを出演者、お客様が一体となって満喫しました。

栄区民謡連盟　原田　直真紗

編集後記

本号は文化協会設立20周年を迎えるにあたっての会長メッセージ、連載の「文化のこころ」、多様な取り組みとして「あーすフェスタかながわ2015」に国際交流として参加した３単協の活発な活動の様子を紹介しました。

さわやか第48号
平成27年９月18日発行
栄区文化協会会長　　風間聰彦
編集：広報部　奥野知行　中田　健

特集１　文化のこころ　写真、囲碁　強い思いが育む文化

写真　写真は人生旅の途中“感動を撮る”
フォトＳＡＫＡＥ　野仲　加津子

《カメラ撮影は何時ごろから始まったのですか》

カメラの起源は、なんと紀元前に遡ると言われています。日本では19世紀中頃オランダ船によって渡来し、島津斉彬公の手に渡り、日本で初めてカメラ撮影されたと記述されています。明治維新の幕末期には有名人の肖像写真が多く撮影されています。私たちが最も多く記憶に残るのは坂本龍馬や高杉晋作ですね。

《写真とどのように付き合ってこられたのですか》

中学生時代に叔父（母の弟）から貰った二眼レフカメラ（BOX型）でのスタートですから、もう60年位になります。学生時代には、その頃知り合った彼(夫)と、彼の家にあった機材でフィルムから印画紙に焼き付け、現像・定着・乾燥と写真家の真似事をしたものです。

20才代の時、職場旅行で撮影した風景写真が作品展で上位に入り感激したことが写真への興味を更に深くしたように思います。その頃は病院勤務をしていまして、レントゲン技師の先生が焼いてくれた全紙の作品はその大きさと美しさに圧倒されたものでした。

結婚後はもっぱら一眼レフカメラを愛用(右の写真)。登山を再開してからは山岳写真が増えていきました。高山の花を撮っても思うように仕上がらず、雪の白さも出せず、かなり苦しみました。ポジフィルムを使うことで徐々に自信も出てきましたが、気に入る写真は数点あれば上出来、といった具合でした。それからはリュックの中はカメラやレンズで埋まり、いつの間にか写真を撮るための登山になっていました。

《写真の楽しさはどんなところですか》

良いシーンに出会ったときに、自分の描いた通りの作品を写し出すことに集中しているときです。立ったり座ったり、角度を変えたりしてファインダーを覗き息を止めてシャッターを切る！…とても興奮しますよ。

私は夜明けのシーンを写し出すことが好きなので、暗いうちから三脚を立てて、寒さに耐えながら長時間露光で、まだ目に見えていない夜明けを自分色に写し込んでいく。山に登り、夜明けにあこがれの富士山も沢山撮りました。その瞬間、心のときめきが私を魅了します。

《作品創りのための撮影旅行などもされるのですか》

所属している写真クラブの撮影会には最優先して参加しています。自分の好きなジャンルにこだわらず、出逢った被写体を大切にして、“ああでもない、こうでもない、ああコレダ！”という具合に撮影していくことは楽しいものです。仲間と同じ被写体を撮影しても、一人ひとりの作風は違いますから、例会でお互いの作品を見ることが大いに勉強になります。

《人物や風景を撮影するときに、それぞれ気をつけることを教えてください》

旅の途中で良いシーンに出逢ったときには、一枚の絵として背景や動きに注意を払い撮らせて貰います。勿論、本人の承諾を頂くことが一番大事です。

ポートレート撮影の時には、モデルさんの良い表情を引き出すことに心掛け、話しかけながらシャッターを切り続けます。必ずよい表情に仕上がります。

風景については、何を撮りたいのか!?が大切です。私はなるべく望遠を使わずに、少しでも撮りたいものに近づくようにしています。遠近感が大事です。また、太陽の位置は必ず確認しますね。逆光・半逆光で撮影します。太陽を背にした順光だと、平面的になりますから、逆光・半逆光で立体感のある作品にしていきます。「写真は光と影の階調」と言われていますので、基本を大切にしています。いつもと違う自然風景、雨・霧・雲・風・光・色彩などを撮っていくことで、思いがけない作品が出来上がることも多々あります。

《良い作品と感じられるポイントはありますか》

それは見る人にメッセージが伝わってくる作品です。ピントがきちんと合っていること、手前にピントを合わせることが、作品をきれいに仕上げます。また、流れを作ることも大切です。例えば花や木々、水面に憩う鳥など、左下から右上に目線が行くように流れを入れると、見て心地の良い作品に仕上がります。

《フィルム写真とデジタル写真の特徴は何ですか》

撮影方法は基本的に同じですが、まだフィルム撮影を中心にしている私には、デジタルカメラよりもフィルムの方が仕上がりに優しさがあるように感じられます。今ではデジタルが主流になっていますし、カラーの発色も改良されて、その差は見分けがつかなくなっているのが現実です。「少し遠くまでのウォーキング」の時はデジタルのコンパクトカメラと一眼レフを愛用しています。写真は人生の一頁だと思っていますので、いつもカメラは旅のお伴となっています。

《フォトＳＡＫＡＥとして予定されている企画等はありますか》

栄区文化協会は設立20周年を迎え、栄区制30周年を迎えるにあたり、いろいろな企画を考えているところです。当面、秋の芸術祭、春の文化祭があります。

現在会員は約70名ですので、100名を目標にしています。栄区で活動されている写真グループは多数あります。是非フォトＳＡＫＡＥに参加され、ご一緒に活動の輪を拡げていきましょう。

囲碁　～栄区囲碁王国を目指して！～
栄区囲碁協会　植田米男・藤田　剛

《囲碁を始めたきっかけは何ですか》

（植田）中学１年の頃、１里の道のりを徒歩での通学帰路、ひと遊びする小学校で職員の方がよく囲碁を楽しんでいました。見よう見まねで、私も碁石を握るようになり、「当り」の連続で石を取ることが出来たことに始まり、「シチョウ」・「追い落とし」に醍醐味を感じたのが私の囲碁の始まりでした。

（藤田）20代前半の頃、職場での昼休みはもっぱらバレーボール、バトミントンなど外で楽しんでいましたが、雨の日はしかたなく職場の先輩たちが打っている囲碁や将棋を見ていました。そんな時にやってみないかと誘われたのが囲碁との付き合いの始まりです。

《囲碁の効能、精神とはどのようなものですか》

（植田）囲碁は、頭のスポーツとして手に石を持ち碁盤上に打ち下ろし、自分の陣地を確保し、相手の意思を尊重しながら手話で対戦します。創造力を豊にし、知的能力･生きる力が育まれ、「囲碁の効能」として身に付きます。また、マナーにも厳しく、「棋道の精神」を尊び「礼に始まり礼に終わる」教えは、人間生活の成長に欠かせない作法として囲碁愛好家に尊重されています。

唐代の名手王積薪作「囲碁の十訣」は、日本の初代本因坊算砂に人生訓「十訣のいさめ」として伝えられ、囲碁だけではなく、深い人生哲学として示されています。

中国から伝来した囲碁は、奈良、室町時代を経て広がりをみせ、戦国時代に入ると戦いのシミュレーションとして多くの武将が囲碁を好んだと言われています。

《囲碁の楽しさはどんなところですか》

（藤田）囲碁の楽しさ、面白さは、奥が深いこと、独創性に富んでいること、戦略的であることなどと言われています。囲碁は勝ち負けを争うゲームですので、負けず嫌いの私にとっては、勝った時のうれしさ、少しでも上達したいと思う気持ちが長年にわたり続けさせているのかもしれません。また、アフター囲碁に仲間たちと一杯やりながら過ごすことができるのも楽しみの一つです。多くの方と顔見知りになり、街の中で挨拶できる人が増えたことは、嬉しい限りです。

《活動状況を教えてください》

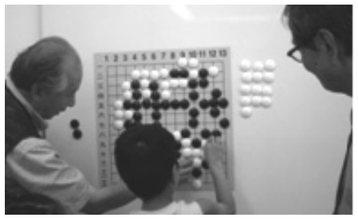
（植田）栄区文化協会の栄区囲碁協会の所属として、栄区囲碁連盟と栄碁クラブがあります。

栄区囲碁連盟（会長三間修司氏、130名）は区民囲碁大会を年4回と地域交流囲碁大会を開催しています。また、栄碁クラブ（会長宇井光政氏、30名）は、毎月の例会と年2回の泊り込みの囲碁大会を実施しています。栄区囲碁連盟と栄碁クラブは、栄区文化協会の発足と同時に加盟し20年目を迎えました。

（藤田）一例ですが、ボランティアの仲間達と介護付き有料老人ホームに出掛けて行き、囲碁の相手をして楽しんでいます。この施設は保土ヶ谷区にありますが、嬉しいことに施設に入居されている2名が最近私が所属しているクラブに入会されて、週1回ですが本郷地区センターで大勢の方と対局を楽しんでおられます。

また、本郷台にお住いの方は67歳から習い始め、95歳の現在は、日本棋院二段の腕前で皆さんと対局を楽しんでおられます。

《習いたい人たちへの入門・上達への取組みはありますか》



（植田）栄碁クラブが全員参加で発足にかかわり、今も私がお手伝いしている栄区囲碁普及会は習いたい人たちに対し指導・育成を行っています。小学生から現役をリタイアした方まで、約100名のインストラクターの指導のもと毎年数十名の生徒が入門して初段を目指し頑張っています。

《初心者へのアドバイスをお願いします》

（藤田）楽しくやることが大事だと思います。楽しさは人によってそれぞれ違うと思いますが、まず実戦対局を沢山打つことです。沢山打つことによって色々なことが解ってくると思います。勝つ喜び、自分の棋力が少し上がってきたと感じる嬉しさもあるでしょう。問題集などで高得点を取った時の嬉しさなどいろいろな楽しみが味わえると思います。コンピューターを相手に楽しむのも良いでしょうが、教室、例会、囲碁まつりなどに参加して大勢の人と一緒にやると楽しさも倍増するかもしれません。

また、強くなりたいと思う気持ちも大切なことだと思います。ライバルを作ったり、自分より少し強い人と打つことが上達の近道だと思います。

《将来、囲碁の世界はどのようになっていくと思われますか》

（藤田）囲碁人口は世界的に見れば約70か国4千万人とも言われ飛躍的に伸びています。また、日本では学校教育にも取り入れているところもあり、ますます盛んになっていくものと思います。

日本は、古来より囲碁は「琴棋書画」の伝えにより、人が学ぶべき芸の一つとして、芸の色合いを強くしてきたため、現状として勝負の方に重点を置く中国、韓国に後れを取っていることが、囲碁フアンとしては歯がゆくてなりません。日本の棋士に頑張っていただきたいと願っています。

（植田）栄区民芸術祭「囲碁まつり」などは、多数の参加者で会場は一杯で、大盛況です。栄区囲碁連盟・栄碁クラブへの一層の入会をお待ちしています。また、神奈川県連の囲碁年鑑には《囲碁王国を目指して頑張る栄区》を掲げ、栄区囲碁への参加をお誘いしています。